冬物語 Second Season

八神大輔

冬物語 intermission

Lost Memories

喫茶店の窓から、小さい女の子が二人、手を繋いで駆けていくのが見えた。
一人は漆黒の髪、もう一人は明るい茶色の髪をしている。どちらも背の半ばまで伸ばしていて、走るたびにそれが柔らかく揺れていた。
私は紅茶を口に運びながら、ふと目を細めた。彼女たちの笑顔が眩しくて。
あの頃の私は……いつも、泣いていたように思う。

＊

あれは私が七歳か八歳ぐらいの頃だろうか。
その日も、私は公園で一人泣いていた。
毎日、学校でいじめられていたからだ。
みんなとは違う目の色、髪の色。上手に話せない日本語。
そんなことで。
周りの何もかもが嫌いだった。
そして、それ以上に、自分が嫌いだった。
もしこんな風じゃなくて、みんなと同じように生まれていたら、きっといじめられることもなかったのに――。
毎日を、そんな繰り言で過ごしていた頃。
「わぁ、綺麗……」
「……え？」
突然、近くで声がして、私は思わず顔を上げた。
すると、黒髪の綺麗な顔立ちをした女の子が、びっくりした顔で私を見つめていた。
私と同じ年ぐらいに見えるその子は、けれど、私とはあまりに対照的に、深い闇のような黒い髪と瞳を持っていた。
だから、私がその子に持った第一印象は、「反発」だったと思う。
今、彼女が驚いているのも、私の瞳を見たからに違いない――そう、思った。
でも、その子は、心配そうに眉をひそめて、首を傾げたのだった。
「どうして泣いてるの？」
「……」
私は思わず目をそらしてしまった。どんな顔をしたらいいのか、わからなくて。
だって、これまでそんな風に心配してもらったことはなかったから。
その子は答えない私に腹を立てるでもなく、しばらくそこに佇んでいたが、やがて、私の隣に腰を下ろした。そして、私の銀がかった薄茶色の髪を、優しい仕草で梳った。
「あ……」
今度こそ茫然と、私はその子を見つめた。その子は猫のような切れ長の瞳を細めて、微笑んでいた。
「ほんと綺麗。銀の髪に金の瞳……お姫様みたい」
「……そんなこと、ない」
再び硬い表情で、私は首を振った。
結局、この子も私の外見が珍しいだけなのだ。私はあなたのような黒髪・黒瞳こそがほしかったというのに。
その子は怪訝そうに、眉をひそめた。
「どうして？　みんな、綺麗だって云うでしょう？」
「……」
無言で首を振る私。本当はもう立ち去りたかったが、その子がしっかり私の髪を掴んでいて、立ち上がるわけにもいかなかった。
「うそ。お母さんは？」
「……え……」
思いがけない言葉だった。

その頃、私の母はすでに亡くなっていた。けれど、いつも私の髪を愛しんでくれたのは、覚えていた。毎朝、母と同じ色の髪に、母が櫛を当ててくれるのが嬉しくて――。
「……うん……」
「でしょ？　私もね、綺麗な髪だって、お母さんがいつも褒めてくれるの。だから、私はこの髪が好き。あなたもそうでしょ？」
そうだ。母が残してくれたこの髪、この瞳。母に生き写しであることが、幼心にも誇りであり、何より嬉しかったはずだ。それなのに。
「……うん」
気がつくと、私は笑顔で頷いていた。
その子は、ニッ、と唇の端だけで器用に笑って見せた。まるで猫が笑ったみたいだった。
そのとき、大人の女の人が、公園に入ってきた。誰かを捜すように首を巡らしながら、声をあげている。
「――、どこにいるの？」
「あ、こっちこっち！」
声を聞いて、その子は立ち上がって手を振った。そして、私に振り向いて、もう一度微笑んだ。
「私、もう帰らなきゃ。ね、また会えるかな」
「あ……ごめんなさい、私、もうすぐ引っ越し……」
そう、このときにはすでにまた父の都合で、海外へ移ることが決まっていた。私はこの瞬間まで、そのことに何より安堵していたものだったけれど。
「そっか、残念。でもきっと、また会えるよね」
その子は一瞬、悲しげに表情を曇らせたあと、精一杯の笑顔を浮かべてくれた。
「私、――。あなたは？」
「……しおん」
「しおんちゃんか。じゃあ、またね！」
またすぐ明日にでも会える友達のように、その子は手を振って、迎えに来た女の人――たぶん、その子のお母さんだろう――の元へ走っていった。
揺れる黒髪を、私は眩しい想いでいつまでも見つめていた。

＊

「――詩音ちゃん、詩音ちゃん、どうしたの？」
「……あ、いえ、何でもありません、失礼しました」
ずいぶん長い間、ぼんやりと窓の外を眺めてしまっていたらしい。
私は苦笑しながら、向かいに座る男性を見つめ返した。
「ちょっと、昔のことを想い出していました」
「昔のこと？　へー、どんな？」
「……秘密です」
「どわっ。秘密多いよ、詩音ちゃん……」
そう云いながら、けれど、彼は嬉しそうに顔中を笑顔にしていた。こちらもつい笑ってしまうぐらいに。
本当、不思議なひとだ。この稲穂信というひとは。
「で、どう？　ここの紅茶は？　今度は俺、自信あるんだけどな」
「そうですね……65点……というところでしょうか」
「うう……まだそんなもんか……。厳しいなあ……」
頭を抱える信さんに、もう一度苦笑しながら、私はまた窓の外を見た。
もう、さっきの少女たちはいない。
――あの想い出の中の黒髪の少女、あの子の名前を、私はどうしても想い出せなかった。
本当に大切なものを気づかせてくれた、とても大事な出来事なのに。
もう一度会いたい……そう考えたとき、なぜか私の頭には、同じく黒髪・黒瞳の凛とした女性が浮かんでいた。
「まさか……ね」

「え？」
「いえ……その……真冬さんは、お元気でしょうか」
私がその名前を口にするのが意外だったのか、信さんはやや驚いて目を瞬かせた。そのあと少し悲しげに微笑んで、首を振った。
『どうかな……あのあとは会ってないし……連絡もないから」
「そうですか……。でもきっと、また会えますよね」
本心からの言葉だった。私は、そのつもりだった。
そのことをきっとわかってくれているから、彼は今度は驚きもせず、ただ穏やかに微笑んで頷いた。
「そうだな」
頷き返した私は、もう一口紅茶を飲んだ。
もう一度会いたい。それはきっと予感――。

end

LOVE -Destiny-

いつの間にか、ずいぶん暗くなってしまっていた。
ちょっと気合いを入れすぎたかも知れない――そんなことを考えながら、白河静流は、夜道を走っていた。
でもその分、会心の出来だと自分でも思う。きっと喜んでくれるに違いない。
両手に抱えた包みを見て、静流の表情はついほころんでしまう。蓋を開けたときの、妹の笑顔が目に浮かぶようで。
――そのとき。
「……え……？」
静流は、その少し狭い道路を横断しようとしていた。右手が曲がり角になっていて、見通しが悪い。その角の向こうから、眩しい光が猛スピードで迫ってきていた。
そのことに気づいた瞬間、静流は逃げるより何より、胸の包みをぎゅっと力強く抱いた。たとえ何があっても、それだけは守ろうとするように。
静流が思わず目を閉じ、衝撃を覚悟した刹那。思いがけず横からの強い力で、静流は路肩に引き寄せられていた。
「……！」
声もなく息を飲む静流の目の前を、車が走り過ぎる。静流の安否を確かめようともせず、文字どおり車は逃げ去った。
「……大丈夫ですか？」
静流は遠くなる車のテールランプを茫然と見ていたが、その声にはっと我に返った。
気がつけば、見知らぬ少年に背後から両肩を抱かれる形になっている。彼が轢かれそうになった静流をとっさに引き寄せて、助けてくれたのだった。今の体勢は、その勢いのまま静流の体を彼が受け止めたからだろう。
「大変……！」
静流は少年の腕から離れると、慌てて抱えていた包みをほどいた。命の恩人に礼を述べることさえ、意識に上らなかった。
可愛らしいリボンで結んだ箱が現れる。そのリボンもほどき、箱を開けるのを、少年も不思議そうに見つめていた。
「……ああ、やっぱり……」
深い落胆のため息が、静流の口からこぼれた。
少年が覗き込んだ先では、美しくデコレーションされたケーキが、衝撃で無惨につぶれていた。「Happy Birthday」と書かれた文字が、かろうじて読める。
静流は力無く、その場に座り込んでしまった。なぜか少年もそれに合わせるように、膝をついた。
「ごめんなさい、僕が急に引っ張ったからですね」
「え……」
そこでようやく、静流は状況を正確に理解した。
顔を上げると、少年が少し困ったような笑顔を浮かべている。線の細い印象を与える、穏やかな風貌の少年だった。
「と、とんでもありません。ごめんなさい、わたしの方こそ、助けてもらったのにお礼も云わず……。本当にありがとうございました」
座り込んだまま、深々と頭を下げる静流。少年は微笑んで、首を振った。
「間に合ってよかったです。……ケーキは、助けられなかったけど」
「……ええ」
静流は視線をつぶれたケーキに戻し、また深いため息をついた。
少年はいたわるような視線を、静流に向けている。
「誰か、大切なひとの誕生日だったんですね」
「ええ、妹の……。驚かせてやろうと思って、友達の家で作ってて……。それなのに……」

「……」
　静流の瞳に涙が浮かんでくる。
　少年はその雫を見て、何を思ったか、不意にケーキに手を伸ばした。
「ちょっと失礼します」
「え？」
　少年は指でケーキのクリームをすくい、口に含んだ。
　目を丸くする静流に、少年が微笑みかける。不思議と心に染み入るような笑顔だった。
「うん、おいしい。全然いけますよ」
「……」
「形が崩れてたって、妹さん、きっと喜んでくれると思います。それに」
「それに……？」
「こんな優しいお姉さんに、もしものことがあったら、きっとものすごく悲しみます。無事でよかったって、何よりそれを喜んでくれると思いますよ」
　云いながら、少年は箱の蓋を取って、ケーキにかぶせた。少し照れたように、頬を赤くしている。
　静流はそんな少年を茫然と見つめていたが、不器用にリボンを結び直そうとしているのを見ている内、徐々に笑顔が浮かんできた。
「ありがとう。……うん、そう、そうですよね」
　はにかんだ笑みで、少年が包み直した箱を差し出す。静流はそれを受け取って、立ち上がった。少年も立ち上がり、軽く頭を下げた。
「じゃあ、僕はこれで。気をつけて帰ってくださいね」
「あ、あの、お礼を……」
「ケーキ、ごちそうさまでした。ほんと、おいしかったですよ」
　そう云って、少年は走っていってしまった。
　名前さえわからないその後ろ姿を、静流はいつまでも見送っていた。

＊

　それが運命の出逢いだなんて考えるほど、静流ももう子供ではなかった。
　ただ、彼の優しさが心にしみて。
　自分にも、ひとつぐらいは真実（ほんとう）があることを、彼なら認めてくれるような気がして。
　ただ、もう一度、逢えればいい。そう思った。
　そして、その願いは、最も残酷な形で叶えられることになる――。

＊

「ねえねえ、お姉ちゃんに会ってほしい人がいるの」
「なあに？　……あ、もしかして、彼氏？」
「えへへ、健ちゃんっていってね、すっごく優しいんだよ」
「そう……。よかったわね、ほたる」

end

冬物語 Second Season

プロローグ「A Song for ××」

居場所がなかった　見つからなかった
未来には期待出来るのか分からずに
浜崎あゆみ「A Song for ××」

雪が降っていた。
すでに陽が落ちてから長い時間が経っている。公園の薄暗い外灯はほとんど役に立たず、辺りは闇に閉ざされていた。
その闇の中に、白い雪が降り続く。
そして、その風景の中に。闇よりなお黒い髪と瞳の少女がいた。
彼女はとても美しかった。
濡れたように黒く艶やかな髪は、腰まで届くほど長い。切れ長の瞳と、柔らかくしなやかな体つきが、猫を連想させた。
だが、いつもなら勝ち気な意志を覗かせて強く輝くその瞳は、今ではただ虚ろに見開かれているだけだった。
白磁のような肌も、不健康に青ざめている。
いったいどれだけの間、そうしてそのベンチに座っているのか。黒い髪にも、黒い皮コートの肩にも、うっすらと雪が積もっていた。
少女と呼ぶには少し大人びて見える彼女の名は、藤村真冬といった。

「稲穂さんは私の大切なひとです……か」
さっき聞いた台詞を、自分で呟いてみる。
三年前、自分には云えなかった言葉。

あのとき、そう伝えられていれば。再び逢えたとき、ただそれだけを伝えていれば。
彼の傍らにあるのは、自分だっただろうか。
そう考えて、真冬の口元に笑みが浮かんだ。
自分自身を嘲る微笑み。何より彼女に似合わないもの。
そんなことじゃないと、わかっていた。ただ彼が選んだのが、私ではなく、あのひとだったというだけだ――。
再び、真冬の面から表情が消え失せる。
それからまた、どれだけの時間が経った頃か。
いつの間にか、真冬のそばに人が立っていた。その人が伸ばした手に、髪に積もった雪を払われ、ようやく真冬は誰かがいることに気づいた。
「……」
無表情なまま、真冬は顔を上げた。
どこか母に似た、穏やかな微笑を浮かべる女性が立っていた。
「風邪、ひくわよ」
軽く首を傾げて、その女性は云った。セミロングにした栗色の髪が、柔らかく揺れた。
真冬はやはり表情を変えず、視線を元に戻した。
「ほら、こんなに冷たくなって」
彼女は再び手を伸ばし、真冬の肩や背中の雪を払った。
散らされる白い結晶を眺めて、真冬はぽつりと呟いた。
「……雪、降ってたんだ」
「何を云ってるの？　もうずっと前からよ。こんなになって――」
「……よかった」
「え……？」
真冬の呟きの意味が理解できず、彼女は手を止めて、真冬の顔を覗き込んだ。
真冬はやはり無表情だった。
雨でなくてよかった。

真冬はそう考えていた。こんな日も雨だったら、きっとやりきれない――。

そんな真冬を、傍らの女性は困ったように眉をひそめて見つめていたが、やがて微笑んで、その隣に腰を下ろした。

「何か、つらいことがあったのね」

「……」

「でも、これ以上、体冷やしちゃいけないわ。ね」

云いながら、彼女は真冬の背に腕を回した。真冬を立ち上がらせようとするように、軽く力を込める。けれど、真冬は動こうとはしなかった。

「……放っておいて」

「そうはいかないわよ」

「名前も知らない、見ず知らずの人間がどうなろうと、関係ないでしょう」

「んー、じゃあ、自己紹介しようか。わたしは白河静流。あなたは？」

真冬の面に、ようやく表情が浮かんだ。苛立ちと困惑を湛えて、真冬は静流と名乗った女性に顔を向けた。

「なんのつもり？」

そのきつい切りつけるような眼差しに、静流は一瞬、怯んだ。だが、またすぐに穏やかに微笑んで、真冬を見つめ返した。

「なぜかな。どうしても、放っておけなかったの」

「……」

静流の答えに、真冬は唇を噛んで目をそらした。

気まぐれな優しさは、何より彼女が嫌うものだった。

「いいから。ひとりにして」

「もう……そんなにひとりになりたいなら、家にお帰りなさい」

「……え……？」

「部屋にこもっていれば、こうやってお節介やかれることもないわ。そうでしょ？」

いたずらっぽく、静流は笑う。その笑みを茫然と真冬は見ていた。

そう、静流の云うとおり。家に帰れば、ひとりきりになれる。

誰もいない、誰も帰ってこないあの家で。

「……いや……」

真冬は小さく、首を横に振った。

さっきまであんなに大人びていた彼女が、今ではとても幼い少女に見える。そのことに驚いて、静流は目を瞠った。

「いや……ひとりの……家には……帰りたくない……」

その顔は静流に向けられていたが、真冬は何も見ていなかった。

ただ何かに怯えるように体を震わせ、虚ろに見開かれた瞳には、うっすらと涙が浮かんできた。

静流は微笑みつつ、そっと腕を伸ばして、真冬を抱きしめた。

真冬は抵抗せず、静流の腕の中で震えている。

まるで小さい子供をあやすように、静流は真冬の髪を撫でた。

『だったら、『ひとりがいい』なんて云っちゃダメよ」

「……」

それは、あまりに似ていた。あの日に聞いた、彼の言葉と。

（淋しいのに慣れただなんて、そんなこと云うなよ）

どうして、今、その言葉を。

二度と聞きたくなかった。

忘れたままでいたかった。

だけど。

もう一度、そう云ってほしかった――。

真冬の瞳から、静かに、しかしとめどなく涙があふれた。

静流はもう何も云わず、ただ真冬を抱きしめていた。

＊

四月。
入学式を終え、真冬は千羽谷大学講堂から出てきた。
サークルの勧誘に目もくれず、真冬はまっすぐ校門に向かって歩いていく。このあとは特に予定もないので、母の病院に寄って帰ろうか、そんなことを考えながら。
校門脇には、大きな桜の樹があった。
真冬はふと足を止めて、桜を見上げ……その表情に、翳りを落とした。
風に舞う桜の花びらを見ると、彼との出逢いを想い出す。
すべての出来事が、彼との想い出に繋がっているような気がした。
こんなつらいことがあるだろうか。
暖かい春の陽気に浮かれ騒ぐ景色の中、ただ彼女だけが、硬い表情で立ち尽くしていた。
「……どうしたの、気分でも悪いの？」
誰かが顔を覗き込んでくる。真冬がそちらに目をやった瞬間、両者は、同時に目を丸くした。
「……！」
「あなた……」
栗色の髪を揺らし、穏やかに微笑むその女性は、白河静流だった。
真冬は乱暴に目をそらす。静流にはあのとき、最も見られたくない姿を見せてしまった。二度と会うこともないだろうということだけが救いであったのに、こんなところで再会するなんて。
静流は真冬の屈託など知らぬげに、変わらず微笑んでいる。
「また会えるなんて、偶然ね。わたし、白河静流。覚えてくれてるかしら？」
「はい。……あのときは、ご迷惑をおかけしました」
静流と目を合わせないようにしながら、真冬は頭を下げた。静流は笑顔で首を振る。
「ううん。……あ、もしかして、新入生なの？」
「……はい」
「そうなんだ。大人っぽいから、同い年ぐらいかと思ってたけど、二つも年下だったのね。驚いちゃった」
「……あなたも、ここの……？」
「ええ、今、三年生よ」
なんてことだろう。真冬は内心、ため息をついた。同じ大学なら、これからも顔を合わせる機会が多いだろう。他人に内面を見せようとしない真冬は、初対面でいきなりあんなところを見られてしまった静流とどう接すればいいのか、文字どおり途方に暮れていた。
「じゃあ、私、失礼します」
「あ、ちょっと、待って……」
「静流、どうしたの？　知り合い？」
とりあえず真冬がこの場を去ろうとしたとき、髪の長い女性がもう一人、声をかけてきた。
静流とは違い、気の強そうな顔立ちをしている。だが、見ず知らずの真冬に対してもにこやかに笑顔を向ける人懐っこさが、彼女の印象を柔らかいものにしていた。
「ああ、小夜美、ちょうどよかった」
静流は軽く手を挙げて、小夜美と呼んだ女性に答えながら、真冬に向き直った。
立ち去り損ねた真冬は、うつむき加減に立っていた。
「紹介するわね。わたしの高校からの友達、霧島小夜美」
「よろしくー。……で、こちらは？」
「えっと……」
小夜美に真冬を紹介しようとして、静流は困惑で眉をひそめた。小首を傾げながら、真冬の瞳を覗き込んでくる。
「あのときは、結局、名前教えてもらえなかったのよね。聞いてもいい？」
「……」

気づかれないように注意しながら、真冬は小さくため息を漏らした。
こんな春の日だまりのような人たちは、本当に苦手なのに。
「藤村真冬……です」
「……え？」
真冬が名乗ると同時に、静流と小夜美は小さく息を飲み、顔を見合わせた。
「……？」
真冬はすっと目を細め、肩に掛かる髪をかき上げた。
強い風が吹き、真冬のその髪と、桜の花びらを舞い散らせた。

そして、季節は巡り、春が訪れる。
けれど、彼女の――彼女たちの冬は、まだ続いている。

第一話「Trauma」

足元で揺れている花にさえ　気付かないままで
通り過ぎてきた私は鏡に　向かえなくなっている
浜崎あゆみ「Trauma」

1

一昔前は、大学の学食といえば、安い代わりに小汚くて味もそれなり、というのが定番だった。

しかし、近頃では大学も学生集めのため、設備充実に力を入れるところが少なくない。ここ、千羽谷大学も例外ではなかった。

採光にも留意し、明るく清潔感のあるそのスペースは、もはや「学食」という響きにはふさわしくなく、大学側が云うとおり、「カフェテラス」の趣があった。メニューもファミレスのランチに類するものが揃えられている。

そうした大学の努力の結果、学食――カフェで女子大生の姿を見ることも、今では特に珍しいことではなかった。

だから。彼女がその中で目立っていたのは、ひとえにその存在感故であったと云えるだろう。

装いは派手ではなく、化粧も最低限にしか施していない。けれど、腰まで及ぶ長く艶やかな黒髪と、黒い宝石のような瞳の煌めきが、彼女の印象を艶やかなものにしていた。

服装は、黒いデニム地のジャケットに、白いロングスカートと、これまたシンプルなものだ。

黒と白は、誰にでも似合う色だという。だが、彼女――藤村真冬ほど、そのコントラストが映えるひとはいなかった。

カフェに出入りする人々は、誰もが真冬に目を奪われていた。

それでいて、真冬の周りには人気がない。

決して真冬が剣呑な雰囲気を醸し出しているわけではなかった。ただ、どれだけ注視を浴びても、それを意識している素振りさえ見せない鷹揚さと、少し物憂げな横顔とが、彼女を近づきがたい存在にしていた。

それは真冬自身が望んで、手に入れてきた環境だったかも知れない。孤独を愛するわけではないけれど、気心の知れない人間と一緒にいるぐらいなら、独りの方が遙かにマシだった。ましてや、食事の席を同じくするだなんて。――こんな風に。

「こんにちは」

柔らかな声に真冬が顔を上げると、栗色の髪を揺らして、白河静流が微笑んでいた。

真冬の目が、わずかに細くなる。その仕草の意味に気づきながらも、静流は手にしたトレイを真冬の前に置いて、言葉を続けた。

「ここ、座ってもいいかしら？」

「……どうぞ。私はもう行きますから」

そう云ったときには、真冬はもう立ち上がっていた。

「え、だって、まだ……」

真冬が食べていたランチは、まだ半分以上残っていた。しかし真冬は構わず、静流のあとからやってきた霧島小夜美に軽く会釈して、歩き去った。

真冬の後ろ姿を見送り、小さくため息をついて、静流は腰を下ろした。小夜美はその向かい、ちょうど真冬が座っていた席につく。そして、箸を取りながら、軽く肩をすくめた。

「もう諦めた方がいいよ。あの子猫ちゃんは、ひとに懐いたりしないって」

「……」

「ましてや、あたしたちが信クンや詩音ちゃんたちと友達だってわかっちゃったんだから……そりゃ、気まずいよ」

「うん……そうなんだけど……ね」
四カ月前のあの事件。小さな、けれど当事者たちにとってはあまりに大きな波紋をもたらしたあの出来事について、小夜美と静流は智也たちから簡単に聞いていた。だから、真冬の名前を聞かされたとき、つい反応してしまったのだ。
結果、彼女たちと信や智也との関係も、真冬に知られることになってしまった。小夜美の云うとおり、真冬が彼女たちを避けるのも無理からぬことだったろう。
「でも……なんだか、放っておけないのよ。何をしてあげられるってわけじゃないのは……わかってるんだけど」
「……」
小夜美はしばし沈黙して、じっと静流の憂い顔を見つめた。そしてふとため息をつくと、運んできたラーメンに箸をつけた。
「……それは、彼女があの雪の日に会った女の子だから？」
「小夜美……どうして？」
小さく息を飲む静流。小夜美はラーメンをすすりながら、やや行儀悪く肩をすくめた。
「静流の態度見てればわかるよ。前、話してくれた、雪の中で出会った女の子……それが、彼女、藤村真冬なんでしょ？」
「……うん……」
「だから、どうしても気がかりでほっとけないと……でもね、静流」
小夜美は食事の手を休めずに話し続ける。それはなぜか静流と目を合わせないようにするためのようであった。
「だからこそ、あの子は静流を避けてるんだと思うよ」
「……」
静流の面に浮かぶ憂いが、いっそう濃くなる。小夜美はやはり静流の方を見ようとせず、箸を動かしながら喋った。
「静流だって、ほんとはわかってるんでしょ？　あの子は、他人に弱みを見せるのを嫌う。それなのに、静流には初対面でいきなり自分のいちばん弱いとこ見られちゃったんだから。他の人と接するとき以上に、静流には頑なになってると思うよ」
「……」
「もう……あの子には、関わらない方がいいよ」
そうでないと、静流が傷つくよ……最後の一言を、小夜美は飲み込んだ。
静流は無言でフォークを取り、パスタに手をつけた。だが、口に運ぶでもなく、フォークにくるくるとパスタを巻き付けてもてあそんでいる。
しばらく、会話のない時間が続いた。やがて、ようやく静流がフォークを持ち上げてパスタを食べる。そして、微笑んだ。
「ありがと、小夜美」
「どういたしまして」
スープまで飲み干して、小夜美も笑みを返した。それだけで、場の空気が柔らかいものになったようだった。
「……そうだ、小夜美、今日これから、空いてる？」
「これから？　無理無理、今日はゼミだよ」
「あ、そっか……」
「どしたの？　なんか用事？」
「うん……ちょっと、つきあってほしかったんだけど……しょうがないわね」
そう云って、静流は少し困ったように微笑んだ。その笑みに、さっきまでの憂いとはまた違う翳りを感じ取って、小夜美は眉をひそめた。
「なに？　なんか嫌なことあったの？」
「あ、ううん、そうじゃないのよ。ただね、これから妹と会う約束をしていて……」
「ほたるちゃんと？　それがなんで……あ……」
静流には、ほたるという妹がいる。とても仲のよい姉妹で、弟を事故で亡くしている小夜美には、羨ましくもあった。
当然、姉妹二人で出かけることも多いだろう。それなの

に、なぜわざわざ一緒に来てほしいだなんて云うのか――そう疑問を言葉にしかけて、小夜美はあることに気づいて口ごもった。

静流はやはり、困ったような笑みを浮かべている。

「もしかして……？」

「うん……そういうこと」

「そっか……。うん、じゃ、いいよ、あたし、ゼミ休むから。つきあうよ」

「ダメよ、そんなの。小夜美のゼミ、厳しいんでしょ？」

思い切りのいい小夜美の申し出に、慌てて静流は首を振った。翳りを振り払うように、笑顔を浮かべる。

「でも……」

「いいのいいの。ごめんね、変な心配させちゃって。大丈夫よ。……それに」

「それに？」

「こういうのにも……慣れなくちゃね」

「静流……」

「……あはは、ほんっとごめん！　さ、もう行こう。ゼミ始まっちゃうでしょ？　わたしも、待たせると、ほたる、すぐ怒るから。自分はよく遅れてくるくせにねえ」

精一杯の笑顔を作ろうとする親友に対して、小夜美がしてやれることは、それ以上は何も聞かずに、頷き返すことだけだった。

「わかった。……あとで、電話するね？」

「……うん」

微笑んで、静流はありがとう、と呟いた。

2

軽く深呼吸をしてから、真冬は病室のドアをノックした。答えを確認すると、自然と笑みがこぼれる。そのままゆっくりとドアを開けて、真冬は病室に入った。

「真冬。今日も来てくれたの」

「……うん。どう、調子は？」

「ありがとう。大丈夫よ」

そう云って、いつものように穏やかに微笑む母・千尋に、真冬もいつもどおり、ニッと唇の端だけで笑って見せた。

千尋はベッドに腰掛けている。真冬はそのそばに置いてあった椅子に座り、手にしていたバスケットを掲げた。

「果物買ってきたの。食べられる？」

「ええ。じゃあ、リンゴもらおうかしら」

「うん」

頷いて、真冬はリンゴを取り出した。千尋から果物ナイフを借りて、器用に皮をむいていく。千尋はその様子を、じっと見守っていた。

「はい、お待たせ。……どうしたの？」

一口サイズに切り分けたリンゴに楊枝を刺し、真冬は千尋に差し出した。そこでようやく、真冬は千尋が自分を見る瞳に、翳りが差していることに気づいた。

「ありがとう。……うん、おいしい」

真冬から受け取ったリンゴを、千尋は一口かじって微笑んだ。けれど、真冬は千尋が浮かべた憂いの理由がわからず、戸惑い気味に見つめ返すだけだった。

「……ねえ、真冬」

「……なあに？」

思わず身を固くする真冬。まるで叱られるのを恐れる、小さな子供のように。

「こうして毎日お見舞いに来てくれるのって、私はとっても嬉しい。でもね、真冬には真冬の生活があるでしょう？　大学に入ったばっかりで、色々大変でしょうし……。もっと自分の時間を大切にしてほしいわ」

「お母さん……」

「これまでだって、ずいぶん無理をさせてきたし……。大学も、真冬なら本当はもっと違うところも狙えたんでしょう？

私を気遣って、近くの大学にしてくれたのよね」
「……それは……」
確かに、千尋の云うとおりだった。真冬の学力なら、選択肢はいくらでもあった。
しかし、真冬は高校に浜咲を選んだのと同様、なるべく母のいるこの街から離れたくなかったのだ。
言い淀む真冬をじっと見つめる千尋の目に、涙がにじんできていた。
「真冬がいてくれて、私は本当に幸せだし、心強い。――でも、これ以上、私のせいで、あなたの――」
「やめて」
母に対しては珍しいくらい強い調子で、真冬は千尋の言葉を遮った。
千尋を見つめ返す瞳にも、涙が浮かんでくる。真冬は思わず千尋の手を取っていた。
「そんな云い方しないで。私が……そうしたくて、そうしてるんだから」
「真冬……」
「私が、お母さんのそばにいたいの。いいでしょう？　そばに……いさせてよ……」
もうほかには、どこにも居場所はないのだから――そう口走りそうになり、真冬は唇を噛んでうつむいた。
千尋はわずかに眉をひそめると、細い腕を伸ばして、真冬の体を抱き寄せた。
「ごめんね。変なこと云って」
「……」
母の腕の中で、真冬は激しく頭(かぶり)を振った。千尋は娘への愛しさを込めて、優しくその黒髪を撫でていた。

3

街を歩きながら、真冬はもう何度目かわからないため息をついた。
母にだけは心配をかけたくない。ずっとそう思ってきたのに。
そんな虚勢は、母にはすべて見透かされていたのだろうか。
千尋は最後に、こう云ったのだ。
（冬以来、真冬、元気なかったみたいだから……気になってたの）
真冬はまたひとつ、大きなため息をつく。なんて無様なことだろう、と。
「――あ、藤村さん！」
「……え？」
不意に声をかけられて、真冬は思わず周囲を見回した。
ちょうどオープンカフェの前を通りかかったところだった。奥の方の席から立ち上がって手を振るその姿に気づき、真冬は傍目にもわかるほど眉をひそめた。
声の主は、静流だったからだ。
どうしてこの人は、こんなときにばかり現れるのか――！
真冬は軽く頭を下げて、足早に立ち去ろうとした。
しかし、静流は相席していた一組の男女に挨拶をして、席を立ってしまった。すでに歩き始めていた真冬はよく見なかったが、女の子の方は、長い髪を二つに分けて縛った髪型が印象的だった。
「あ、待ってよ、藤村さん」
小走りに駆けてきて、静流が真冬の隣に並ぶ。真冬は静流を見ようともせず、軽くため息をついた。
「人をだしに使うのはやめてください」
「……え……」
「そうでしょう？　わざわざ人と会っているときに、その人を放り出して私のところへ来るような用事があるとは思えません。私たちは、親しい間柄でもありませんし」
後半の台詞に特に力を込めて云い、真冬は静流を横目で睨んだ。

静流は困惑に表情を曇らせたが、足を止めると、深々と頭を下げた。そのまま無視するわけにもいかず、真冬も足を止める。

『ごめんなさい。だしに使うとか、そんなつもりじゃなかったんだけど……あそこから離れる理由がほしかったのは、確かだから。……同じことね。本当にごめんなさい』

顔を上げた静流は、悲しげな瞳でじっと真冬を見つめながら、そう云った。

真冬は乱暴に目をそらしてしまう。どこか印象が母に似ているのが、真冬が静流を苦手とする理由のひとつでもあった。

「もういいです。――言い過ぎました。私の方こそ、申し訳ありません」

「ううん、そんなことない。わたしがどうかしてたわ。妹にも、あとで謝っておかなくちゃ」

『妹さん……？』

意外な言葉に、真冬は首を傾げた。

苦手な相手に捕まってしまったから、どうにか逃げ出す口実がほしかったのだろう、と単純に真冬は考えていた。しかし、それが妹とは。

真冬の呟きの意味に気づき、静流は慌てて首を振った。

「あ、勘違いしないでね。妹と仲が悪いとか、そういうんじゃないのよ」

「……」

「ただね、最近、出かけるときはいつも彼を連れてくるのよ。仲がいいのはいいんだけど……あんまり見せつけられると、独り身としてはつらいじゃない？」

「……」

『気を遣ってあげないと、彼にも悪いし……。あはは、おばさんくさいかな、こういう発想って』

「……」

不自然なほど明るい笑顔で、訊かれてもいないことまで喋る静流を、真冬は目を細めてじっと見ていた。その視線に、静流が居心地悪げに口をつぐむ。

……どうして、このとき、ただ「そうですか」と頷いてすませてしまわなかったのか。真冬は自分でも不思議だったが、気づいたときには、その言葉が口をついて出ていた。

「……好きなんですか？　その彼のこと」

「……っ……」

見る見る静流の表情が青ざめていった。真冬はまるで断罪するかのように、冷たい視線でその姿を見ていた。

『何を……そんな……』

『好きなのに、黙って見ているの？　どうして？』

静流の言い訳など、真冬は聞いていなかった。真っ直ぐ、斬りつけるような視線で静流を見据えたまま、言葉を叩きつけた。

静流はただ蒼白になった面を逸らし、うつむいた。

「……しょうがないじゃない……」

『だから、どうして？　妹の恋人だから？』

「……残酷なことを、聞くのね……」

唇を噛みしめ、瞳にうっすらと涙をためて、静流は真冬を見返した。

それでも真冬はかけらほどの同情も見せることなく、ただキツい眼差しを静流に向けて立っていた。

『どうして、そんな理由で諦められるの？　私には信じられない』

「……」

そんな理由。なんて言い草だろう。誰もがそう考えるに違いない。なんて傲慢な言葉だろうと。

けれど、静流はわずかに息を飲んだあと。小さく、微笑んでいた。

はかなく、穏やかに。

その笑顔は、何より真冬を苛立たせた。

『諦めるのは、慣れてるの』

『嘘よ……！　愛しているのに……かけがえのない、たったひ

とつのものなのに……どうして諦めることができるの！　何を犠牲にしたって……誰を傷つけたって……私は……！」
「……」
　静流はもう答えなかった。ただやはり悲しげに微笑んだまま、激情に燃える真冬の黒い瞳を、じっと見つめていた。
「そんなの……私は絶対認めないから……絶対……！」
　吐き捨てると、真冬は静流に背を向けて歩き出した。ほとんど駆け足に近いほど、足早に。
　静流はその後ろ姿を見送りながら、眉を寄せてため息をついた。そこには、これまでよりいっそう深い憂いがあった。
「……わたしだって……」

4

　あの冬の日のように、激しい感情に突き動かされて、真冬は歩いていた。
　そうだ、決して諦めない。諦めることなんてできない。
　だって、今でもこんなに愛しているのに……！
　あの日、雪の中で死に絶えたと真冬自身も考えていた想い。それが再び炎となって、真冬の胸で燃えていた。
　――しかし。
　古ぼけたアパートの前で、真冬は足を止めた。
　表札には『朝凪荘』とある。
　真冬がただ一人愛した男・稲穂信が住んでいる場所。
　そして。
　彼が誰を選んだか、己のその目で確認した場所。
「――――――」
　激情がたちまち冷えていくのが、自分でもわかった。
　そうだ、諦めたくはない。この想いを捨てることなんてできない。
　――だけど、だったらどうすればいいのだろう。
　諦められないなら、奪うしかないのか。
　そのために、もう一度、信を……彼の大切な人達を、傷つけるのか。
「……う……」
　足元から崩れ落ちそうになり、真冬は門に手をついて体を支えた。
　押さえようのない嗚咽は、やがて激しい慟哭に変わる。
　何をなくしても、誰を傷つけてもいい。
　だけど、信は。最愛のひとさえ傷つけて、それで何を得られるのだろう。
　そんなことに、二度と耐えられるはずがなかった。
「……信……どうして……」
　三年前、真冬は本当に大切なものに気づきながら、どうすることもできず、ただ泣き崩れるのみだった。
　そして今も。その胸に変わらぬ真実を抱きながら、やはり同じように、為す術はなく。
　だから、真冬は。
　ただ泣き崩れるしか、できなかった。

第二話「TO BE」

自分自身だったか　周りだったか　それともただの
時計だったかな　壊れそうになってたものは
浜崎あゆみ「TO BE」

1

「……あ……」
「……」
大学の廊下を歩いていた静流と小夜美は、真冬とすれ違った。
これまでなら強いて明るい笑顔で挨拶をしていた静流が、困惑気味に眉をひそめる。真冬も顔を背けたまま、歩き去ってしまった。いつもなら、会釈ぐらいはするというのに。
「……どうしたの？」
そんな二人を交互に見比べながら、小夜美が首を傾げた。静流は小さく笑って、首を振るばかりだった。
「ううん、なんでも」
「なんでもないってことはないでしょう。ものすっごく険悪な雰囲気じゃない？　確かに彼女は静流を避けてたけど、あんな風じゃなかったよ」
「……」
「それに……そもそも、静流が……変だよ、そんなの」
「小夜美……」
暗い――いっそ、泣き出しそうでさえある表情で覗き込んでくる小夜美に、静流はまた小さく微笑んだ。この親友には、本当に、隠し事なんてできない――。
「うん……ちょっとね。小夜美の忠告を、ちゃんと聞かなかったわたしが悪いの。本格的に嫌われちゃったみたい」
「静流……」
何があったのか、とは小夜美は尋ねない。小夜美がいちばん心配していた部分に、二人が踏み込んでしまったのだと、静流の表情からわかったから。
だけど、これでよかったのかもしれない。このまま二人が距離を置いてくれれば。小夜美はそう思っていた。――静流の、次の台詞を聞くまでは。
「わたしみたいに弱い女は、きっと、嫌いなんでしょうね」
「……」
小夜美が、足を止める。数歩歩いてからそのことに気づき、静流が怪訝そうに振り向いた。
「小夜美？」
「なに、それ。彼女がそう云ったの？」
「え……？」
小夜美はうつむいていたが、その面には、隠しようもなく怒りが覗いているのが、静流にはわかった。拳を震わせてさえいたかもしれない。
「じゃあ、強いって何？　あの子がいなくても、こうして笑っていられるあたしは強いのかな？　それって、ただ最低な女じゃないの？」
「こ……小夜美？　どうしたの、急に？」
「静流は、弱くなんかないよ。それはあたしがいちばんよく知ってる」
そう云って顔を上げた小夜美は、まるで睨むような視線を静流に向けた。
静流は戸惑い、言葉を失うばかりだった。

2

八つ当たりだと自分でもわかっていたから、真冬は険しく眉をひそめて、小さく舌打ちした。

静流がどんな恋をしようと、自分には関係ないはずだ。他人に干渉することもされることも、望んではいなかったはず。

静流の前では、いつもの自分を保てない。それはやはりあの冬の日の出来事のせいなのか。それとも……。

険しい表情のまま、真冬は校門を抜けようとした。そこで、真冬は見覚えのある女性が門にもたれて立ち、自分を見つめていることに気づいた。

「やっ」

緑の黒髪、という言葉がある。彼女にはその表現が似合っていた。真冬とはまた違う趣を持つ、その黒く長い髪を揺らし、彼女、霧島小夜美は軽く手を挙げて見せた。

「……」

真冬は軽く会釈して、その前を通り過ぎようとした。

静流の親友である小夜美とは、真冬も何度か会っているし、紹介もされた。しかし、静流とは対照的に、小夜美は真冬に積極的に話しかけることはなかった。

だが、このときは違っていた。

「ちょっと待って」

「……？」

足を止め、真冬が振り返る。小夜美は真剣な面持ちで腕組みし、首を軽く振った。

「顔貸してよ」

「……」

真冬の黒い瞳がすっと細くなり、まっすぐに小夜美を見つめた。小夜美も怯むことなく、その強い視線を見つめ返す。

やがて、真冬が呟いた。ニッ、と唇の端だけで、猫のように微笑んで。

「校舎裏に呼び出しですか？」

「そ。ぼっこぼこにしてあげるから、覚悟しなさいよ」

腕まくりするポーズを取る小夜美に、真冬はつい苦笑してしまった。

彼女にはなぜだか反感を抱かせず、つい心を開いてしまいそうになる雰囲気があった。―― 信と、どこが通じるものが。

真冬の苦笑に、小夜美は照れ臭そうに笑い返すと、踵を返して歩き始めた。不思議なくらい素直に、真冬はそのあとに続いた。

＊

「……白河さんのこと、ですよね」

小夜美が切り出すより早く、真冬の方から口を開いた。

真冬は冗談のつもりで云ったのだが、小夜美は本当に真冬を校舎裏に連れてきていた。人目につかない場所を選んだ結果なのだろう。

狭い裏庭のような格好のその場所で、すでに葉桜となった樹の幹にもたれて、真冬は立っていた。小夜美はその前に立ち、腕組みをしたまま難しい顔をしている。

「まあ、ね」

「失礼なことをしている、というのはわかっています」

そう云うと、真冬はため息をついた。小夜美は答えず、真冬を見つめるだけだった。

「謝っておいてください。お願いします。……それと、もう私に関わらないでほしいと」

「……」

「……昔、云われたことがあります。私には人を傷つけることしかできないって。だから――」

「嘘だね」

小夜美は不意に真冬の言葉を遮った。そのときようやく真冬は、小夜美が自分を見る視線に、痛ましげな色が生まれていることに気づいた。

―― 静流や、信と同じく。自分を落ち着かなくさせる、その想い。

真冬は思わず目をそらしてしまっていた。

「そんなはずないよ。信クンが好きになったひとが」

「やめてください」
叫ぶように、真冬は答えた。
そんな言葉、聞きたくなかった。だったらなぜ、彼は私から去っていったというのか。
蒼白な面持ちで唇を噛む真冬の横顔を、小夜美はやはり痛ましげに見つめていた。
「そうだね。ごめん。こんな話をしたいんじゃなかった」
「……」
「……ほんとはね、あたしもあなたに、もう静流には関わらないでほしいって云おうと思ってたんだ」
「……」
真冬は無言で頷いた。そうだ、それしか方法はない。傷つけないためには、関わらないこと……。
けれど、小夜美の話には続きがあった。
「あたしが本当につらいとき、静流だけが支えになってくれた。静流がいなければ……あたし、生きていなかったかもしれない」
真冬は驚いて、思わず顔を上げて小夜美を見た。このいつも晴れやかに笑うひとに、そこまで思い詰めることがあったなんて。
小夜美は小さく笑い、空を見上げた。いつもの笑顔とは違う、はかない、透明感のある笑み。
「あの子はね、いっつも人のことばっかり考えてるんだ。自分が傷ついてもいい……ううん、自分が傷ついてすむなら、それでいいって」
「……」
「それをあの子の弱さだって……自分の意志を貫けない弱い心だって思われるのだけは、我慢できなかった。だから、もう静流に近づかないでって云おうと思ったの」
「それは……」
そんなつもりではなかった。ただ、自分は……。
――ただ、自分は？
自分が何を云おうとしたのかわからず、真冬は戸惑って口ごもった。
そんな真冬に、小夜美は微笑みを向けた。すべてわかっている、というような、穏やかで、悲しげな微笑を。
「うん、わかってる。そんな簡単なことなら、もう静流に近づくなー！って怒鳴って終わりなんだけど……やっぱり、違うんだよね。あたしが、思った通り……」
「霧島……さん？」
「あたしね、本当に、あなたたちには関わり合ってほしくなかった」
小夜美が、じっと真冬を見つめてくる。真冬はなぜか、動悸が早くなるのがわかった。
「あなたと静流はね、よく似てるんだよ」
「似てる……？」
瞳を細めて、真冬は首を傾げた。
私とあの人の、どこが似ていると云うのだろう。むしろ何もかも正反対ではないか。だからこそ、彼女を見ているとこんなにも苛立つのだ。――そう、思っていた。
けれど小夜美は、悲しげな眼差しを真冬に向けたまま、言葉を続けた。
「そう、似てる……。あなたたちは、同じ壁にぶつかって、全く正反対の答えを選んだ……。お互いが選んだ、もうひとつの答えを見ないようにして」
「……！」
真冬は息を飲んで、目を見張った。
小夜美は苦渋を浮かべながらも、目をそらさない。端から見れば、小夜美の方がつらい告白をしているようにさえ見えたかもしれない。
しかし、実際には、耳をふさいで逃げ出したいと思っているのは、真冬の方だった。
「そんなの、気づかないままでいられればよかったんだよ。もっとつらくなるだけなんだから。だから、あなたたちに関わり

合ってほしくなかったの。だけど……だけど、もしかしたら……」

「……気分が悪いので、失礼します」

ついに耐えられず、真冬は小夜美に背を向けた。

そのまま歩き去ろうとする真冬の腕を、小夜美は慌ててつかんで引き留めた。

「ちょ、ちょっと待ってよ、まだ話は……」

「もう結構です。聞きたくありません」

真冬は小夜美の腕を振りほどこうとする。だが、小夜美はさらに力を込め、真冬の両肩をつかんで自分の方に向き直らせた。

「放してください……！」

「ねえ、ちょっと落ち着いて、聞いて」

真冬は小夜美の言葉に耳を貸さず、聞き分けのない子供のように首を振った。そして、かすれた声で、呟いた。

「お願い……もうやめて……」

「……」

その声のはかなさに、小夜美は思わず手を離してしまった。駆け去っていく真冬。

傷ついた子猫のようなその後ろ姿を、引き留めることもできず見つめていた小夜美は、やがて深いため息をついた。

「裏目に出ちゃったか……」

同じ痛みを抱きながら、全く違う答えを選んだふたり。だからこそ、互いがこれまで気づかないふりをしてきた真実と向き合い、変わっていくことができるのではないか。小夜美は、そう期待したのだったけれど。

「焦りすぎたかな……。静流になんて云おう」

もう一度ため息をついて空を見上げると、さっきまでの青空が嘘のように、どんよりとした雲が空を覆っていた。

「……うわ、最悪」

3

駅の改札の前で双海詩音は軽く微笑み、会釈した。

「それでは、お仕事頑張ってください。ごきげんよう」

その笑みに、稲穂信は情けないぐらい相好を崩してしまう。せっかく買った切符をポケットにしまい、信は大袈裟にため息をついた。

「ああ、名残惜しいなあ。今日はもうバイト休んじゃおうかな」

「いけません」

途端に、詩音の表情が険しくなる。図書室で怒られたときのように、眉をひそめて厳しい視線を送る詩音に、信は思わず後ずさった。

「信さんはもう社会人なのですから。たとえバイトとはいえ、自分の務めをおろそかにしてはいけません」

「はい……ごめんなさい」

素直に頭を下げる信。詩音は苦笑しつつ、小首を傾げた。

「……また明日、逢えますよね」

「ああ」

信が顔中を笑顔にして頷いた。どんな不安も寂しさも消し飛ばしてしまう、詩音の大好きな、その笑顔。

「それじゃあ、また明日。雨降りそうだから、詩音ちゃんも気をつけて帰ってね」

「はい、ありがとうございます。ごきげんよう」

大きく手を振りながら、信は改札を抜けていった。詩音は少し恥ずかしそうに小さく手を振ってそれに答え、信の姿が見えなくなると、踵を返して家路についた。

＊

信の言葉どおり、雨がすぐに降り出した。

それもぱらぱらと降り出したかと思えば、いきなり豪雨に早変わりだ。

詩音は手近な書店に飛び込んで時間を潰していたが、どうにもやみそうにない。諦めて、傘を買うことにした。せっかくだから本も買って帰りたかったが、この雨に濡れて本が傷むのは我慢できない。

（信さん……大丈夫だったでしょうか）

新品の白い傘を開きながら、詩音はそんなことを考えた。最寄り駅から信のバイト先のファミリーレストラン「ルサック」までは、少し歩く。その間に、雨に打たれていなければいいのだけれど。

ルサックまで一緒に行けばよかった……そんな自分の考えに頬を赤らめながら、詩音は雨の中、帰っていった。

今日も、父は家にいない。お手伝いの人も、もう帰っているだろう。

これまではけして嫌いではなかったはずの、ひとりきりの静かな時間。それが今では、少し淋しく思える。

そんな自分の変化が、変わってしまったことを好ましく思えることが、詩音は嬉しかった。

角を曲がると、ようやく自宅の門が見えた。

そして、その前に佇む人影が。

「え……？」

痛いほど激しい雨の中、彼女は傘も持たず、ただ雨に打たれるまま立ち尽くしていた。

艶やかな黒い髪が濡れそぼち、白い肌に張り付いている。

黒瞳は、ただ虚ろに見開かれていた。

詩音は一瞬驚いて足を止めたが、すぐに彼女の元へ駆け寄った。

「真冬さん……！　どうしたんですか、いったい……!?」

傘を差し掛けられ、真冬はゆっくりと面を上げた。

瞳に、強い光が戻ってくる。張りつめた、斬りつけるような意志の光。

けれど、次の瞬間には、その瞳には涙が浮かんでいた。

その姿に戸惑いながらも、詩音は真冬に家へ入るよう促そうとした。

「こんなに濡れて……。早く上がってくださ――」

「……返して」

真冬の背に回そうとした詩音の手を、真冬が掴んだ。

瞠目する詩音を、真冬がまっすぐに見つめる。睨むようではなく、すがるようでもなく。

ただひとつの願いを、涙に宿して。

「信を……返して……」

「……真冬さん……」

答える言葉もなく、詩音は真冬を見つめ返す。

そこで不意に、真冬の黒い瞳が閉じられた。意識を失い、崩れ落ちる真冬。

詩音は慌てて真冬を抱きかかえた。白い傘が地に落ち、くるくると回った。

「真冬さん！　真冬さん！」

ますます激しくなる雨が、詩音の叫びさえかき消していく。

真冬はただ、深い闇の中に堕ちていった――。

第三話「End roll」

君はどこにいるの
君はどこへ行ったの
遠い旅にでも出たんだね
一番大切な人と
浜崎あゆみ「End roll」

1

意識を失う前のことを、何も覚えていない――そんな都合のいい話が、実際にあればいいんだけれど。

真冬は窓から差し込む朝日に目を細めながら、そんなことを考えた。

実際には、自分が昨日何をしたか、真冬ははっきりと覚えていた。降りしきる雨の中、自分が何を云ったのかも。

「……なんて、無様」

陽光から隠すように、真冬は両腕を上げて顔を覆った。

自分が情けなくて、涙も出ない。ただ深いため息だけがこぼれた。

静かな足音が近づいてくる。そちらへ顔を向けると、銀がかった薄茶色の髪を揺らして、美しい少女が微笑んでいた。

「おはようございます」

「……おはよう」

短く答えたあと、真冬は辺りを見回した。

高い天井。洋館風の作り。暖炉。自分のものではないベッドと寝間着。

状況を正確に理解して、真冬は再度大きなため息をついた。

『ごめんなさい、迷惑かけて』

ベッドサイドに立った少女――詩音の目を見ずに、真冬は呟いた。

詩音は答える代わりに微笑み、そっと手を真冬の額に伸ばした。

「……あ……」

『失礼します。……うん、熱はないみたいですね』

屈託なく笑う詩音を、真冬はじっと見つめた。詩音は不思議そうに首を傾げる。

『紅茶、入れてきますね。……あ、真冬さんは珈琲の方がいいですか？　珈琲だと……インスタントしかないんですけど……』

「……紅茶でいいわ」

『はい。では、少々お待ちください』

再び静かな足取りで、詩音が歩き去っていく。

やがて紅茶の芳香が部屋に届き、詩音が両手でトレイを持って帰ってくるまで、真冬は唇を固く結んで虚空を見据えていた。

ベッドサイドの机にトレイを置き、詩音がカップを差し出した。

『どうぞ。起きられますか？』

「ええ」

上体を起こして、真冬はカップを受け取った。すぐには口をつけず、琥珀色の水面を見つめる。香りを楽しむというより、猫舌の真冬は、冷めるのを待っているのだった。

しばらくして、ようやく真冬はカップを口に運んだ。

詩音は何も云わず、真冬の様子を見守っていたが、紅茶を一口飲んだ真冬の目がわずかに大きくなったのを見て、微笑んだ。

「……おいしい」

『ありがとうございます』

『紅茶も入れ方でこんなに違うのね……』

「はい」
相変わらず詩音の目を見ずに、真冬は淡々と呟く。詩音も変わらず微笑んだまま、そんな真冬を見守っていた。
飲み終えたカップを、真冬はトレイに戻した。
「お代わり、入れましょうか？」
「……いい」
軽く首を振り、真冬はベッドの上で膝を抱き寄せ、顎を載せた。
思いがけず子供のようなその仕草に、なぜだか詩音の胸は痛んだ。
その姿勢のまま真冬は首を傾げ、詩音を見た。闇より暗い瞳で、まっすぐに。
「みっともないね、私」
「真冬さん……」
「笑ってもいいよ。軽蔑したっていい。こんな……無様な……！」
唇を噛みしめて、真冬は肩を震わせた。けれど、詩音から目をそらすことはなく。
詩音はかすかに眉をひそめて真冬を見つめていたが、やがて微笑んで、首を振った。
「誰もあなたを笑うことなんてできません。そんなの、私が許さない」
「……え……？」
「そこまで誠実にひとを愛するあなたを、誰が笑えるのですか」
茫然と目を見開く真冬。詩音は微笑んだまま、そっと真冬の手を取った。
「だからこそ、私には自分から身を引くなんてことはできません。あのひとを大切に想い続けることが、私のあなたに対する誠実さだと思うから」
「……あ……」
それが昨日の自分の言葉への答えだとわかったから、真冬は小さく息を飲んだ。
ようやく見つけたかけがえのない想い、それを諦めるしかないのだと思い知らされて。
本当に悲しかったのは、とっくに自分でも気づいていたのに、気づかないふりをしていただけだとわかってしまったことで。
本当にもう自分には何もない。そう考えた、ぎりぎりの自分から出てきた言葉。
（信を……返して……）
だけど。
私は、今度も、間違っていた、のかも、しれない、――。
「ごめんなさい……」
「真冬さん……？」
「ごめんなさい……私……ごめんなさい……」
それはすでに慟哭でさえなく。ただか細い呟きが、静かな涙と共にこぼれ落ちていた。

2

再びベッドで横になり、真冬は窓の外を見ていた。
詩音の姿はない。朝食を用意するため、キッチンへ行っていた。
（もう……謝らないでください）
去り際に、詩音は優しく真冬の髪を撫でて、そう云ってくれた。
けれど、真冬は唇を噛んで、自身を強く責め続けた。
自分はいったい何を見て、何をしてきたのだろうと思う。
誰かが、誰かを愛している。
詩音も。静流も。母の千尋も。
誰もがかけがえのない想いを、胸に秘めて。
自分はそんなことにさえ気づこうとしなかった。
（あんたはひとりでしか生きられないんだもの）

かつて、叩きつけられた言葉。その意味。
(俺は……自分が許せない)
かつて、偽善だと決めつけた言葉。その意味。
そんなことが、今になってやっとわかるだなんて。
だから、これはきっと……そう、真冬が考えたとき。
チャイムの音がした。
玄関の呼び鈴らしい。詩音が応対に出る声がしたかと思うと、ばたばたと慌ただしい足音が響く。何事かと真冬が首を部屋の入口に向けると同時に、ドアが大きく開け放たれた。
『真冬……！　倒れたって……大丈夫か!?』
「……信……」
息を飲んで、真冬はそこに立つ男の姿を見つめた。
信はずっと走ってきたのだろう、肩で息をついている。
間もなく、ぱたぱたと詩音があとを追ってきた。
『信さん、女性が休んでいる部屋を、ノックもなしに開けるなんて……』
「あ、ああ、悪い、ごめんよ」
咎められ、慌てて信はあたふたと頭を下げる。
そんな二人の様子に、真冬は小さく苦笑した。
(そう……これがきっと……罰……)
その苦笑をどう理解したのか、信も微笑みながら、けれどやはり心配そうに眉をひそめて、真冬のそばに近づいた。
『びっくりしたよ。詩音ちゃんから連絡もらって……』
「……彼女には、本当に迷惑かけたわね。ごめんなさい」
『真冬さん、それはもう……』
「――心配してくれたんだ？」
真冬は呟いて、信を見上げた。まっすぐなその視線は、少しだけ詩音を落ち着かなくさせた。
信は戸惑いながらも、強く頷いた。
「あったりまえだろが」
「……ありがと」

真冬はニッ、と唇の端だけで笑って見せた。猫のよう、と彼女が呼ばれる由縁。
だが、信は、そこに奇妙な違和感を覚えてしまった。
『真冬……？』
「もう大丈夫。帰るわね」
そう云って、真冬は体を起こした。詩音がその体を支えるように、そばに駆け寄ってくる。
『無理しないでください。まだ休んでいた方がいいのではありませんか？』
『平気よ』
「じゃあ……朝食を用意しましたから……せめて、召し上がっていってください」
心配そうにじっと見つめる詩音。真冬はしばし見つめ返したあと、悲しいほど優しい笑顔を浮かべた。
「うん。じゃあ、ごちそうになるわね」
「はい」
詩音がほっと息をついた。
信はやはり正体のわからない胸騒ぎを抱えて、二人の笑顔を見つめていた。

3

食事の間、真冬は言葉数は少なかったものの、屈託なく笑顔を浮かべているように見えた。
いつもの張りつめた雰囲気もなく。母・千尋のように穏やかに笑う真冬に、信はどうしても不安を感じてしまった。
彼女が無理をしているとは思えない。しかし、何か表現しがたい危うさを覚えて。
だから、真冬が帰るとき、信は強い調子で送っていくことを主張した。
何度断っても退かない信に、真冬は苦笑を漏らして、頷いた。

「わかった。じゃあ、お願い。……双海さんも一緒に、ね」
「は……はい」
詩音は頷きながらも、戸惑って信の表情を伺った。
信も小首を傾げつつ、頷く。
真冬はただ微笑んでいた。

＊

三人で辿る帰り道。
真冬は、信と詩音より少し前を歩いていた。
わずか半歩。それがけして越えられない溝のようで、信と詩音は悲しくなった。
だが真冬はまっすぐに背筋を伸ばしたまま、頑なにその距離を保っていた。
やがて、ろくな会話もないまま、三人は藤村家の前に到着した。
「それじゃ。二人ともありがと」
真冬が振り向いて、笑う。穏やかに、はかなげに。
その頃には、詩音も真冬の様子がおかしいことに気づいていた。しかし、信と同様、はっきりと言葉にすることができず、ただ二人は曖昧に頷き返すだけだった。
「……いや……」
「お体、大切にしてくださいね」
「うん」
もう一度微笑んで、真冬は信の顔を見つめた。
不意に笑顔が失われ、思い詰めた表情になる。
「真冬……？」
「……」
すっ……と、真冬は右腕を伸ばした。
信と詩音が首を傾げる暇もなく、伸ばした腕で信の胸倉を掴む。そして、無理矢理引き寄せ、唇を重ねた。
「――！」
「……！」
信が目を見開き、詩音が息を飲む。
口づけは、ほんの一瞬だった。軽く、わずかに触れ合うだけのキス。
真冬は体を離して、再び信を見つめた。
「真冬……お前……」
「……いいでしょう？　これで最後なんだから」
一歩、真冬が後ずさった。後ろ手で門に手をかける。
「最後って……」
「……二度と、逢わない」
囁くような声だった。
微笑んだ真冬の瞳に、涙が浮かぶのを信と詩音が気づいた瞬間、真冬は身を翻して門をくぐり、そこを固く閉ざした。
「真冬……！　お前、何を……」
「真冬さん！」
呼びかける声に決して振り向かず、真冬はドアを開けて家に入った。
鍵を閉めて、ドアに背をもたれさせる。そのままずるずると、崩れ落ちた。
あの日と同じように。ただ泣き崩れて。
けれど、あの日と決定的に違うのは、真冬が自ら望んでこのドアを閉ざしたこと――。
「さよなら……信……」
かすかな嗚咽の中で、別れの言葉を、真冬は呟いた。

第四話「M」

'MARIA' 愛すべき人がいて
時に　深く深いキズを負い
だけど　愛すべきあの人に
結局何もかも癒されてる
浜崎あゆみ「M」

1

「おはようございます」
「おはよう……って、……え!?」
軽く頭を下げて傍らを通り過ぎた黒髪の女性に、何気なく挨拶を返した静流と小夜美は、それが誰か気づき、慌てて振り返った。
彼女は振り向かず歩き去ってゆく。その後ろ姿を、二人は半ば茫然と見送っていた。
「今の……藤村さん、だよね？」
「うん……間違いない……けど」
先日の静流との口論以来、真冬は静流を無視してきた。小夜美にしても、この間の一件以来、気まずい想いがあった。
だから、あんな風に真冬から挨拶されるのは、二人にしてみれば意外なことだったのだ。
「どういう心境の変化だろ？」
小夜美が腕組みをして首を傾げる。静流も軽く眉をひそめた。
「さあ……」
「あたしたちが云ったことなんて、取るに足りないって思われてたら、悲しいけど」
「そういう娘じゃないと思うわ」
「そうだよね。……じゃあ、何かあったのかな？　ここ何日か、大学で見かけなかったけど……」
「……」
「やっぱり、あたしが余計なこと云ったからかなあ……」
「小夜美……」
暗い表情になって、小夜美がため息をついた。静流は親友を元気づけるために、強いて明るい笑顔を作った。
「もともとはわたしとのことが発端なんだから、小夜美が責任感じることじゃないわよ」
「でもさ……」
「とりあえず、もう少し様子を見ましょう」
そう云って、静流はもう一度、真冬が去った方向を振り向いた。
一瞬、すれ違っただけだったが、静流には、真冬がこれまで持っていた張り詰めた雰囲気をなくしているように思えた。
それがいいことなのかどうか、静流にはまだわからなかった。

＊

静流たちとすれ違ったあと、真冬は小さく息をついた。
とりあえず、そんなに不自然ではなかったと思う。
何もなかったのだと考えればいい。
――だって、何も変わっていないのだから。
信は、かけがえのない想いは、はじめから失われていた。私は子供のように、その事実を見ないようにしていただけ。
だから。何も変わっていないのだから、何もなかったのと同じ。
真冬はそう考えることにしていた。かつて、自分から信と距離を置こうとしていたときと同じように。
教室に入り、席に着く真冬。いつもの癖で肩にかかった髪

をかき上げたところで、ふと何かに気づいたように、自分の髪を一房手に取った。
「切ろうかな、髪……」
もう髪を伸ばしている理由はないはずだった。だけど。
(綺麗な髪だな……)
(俺、真冬の髪、大好きだったよ)
胸の裡から響く懐かしい声を振り払うように、真冬は頭を振った。伏せた面で、ニッ、と唇の端だけで笑ってみせる。捨てられた猫のように。
「未練ね……。ほんと、私、みっともない」

2

電話の音に、少女は勢いよく立ち上がり、文字どおりダッシュで受話器を取った。
「はい、白河です！　……なーんだ、信くんかあ。健ちゃんからだと思ったのにー。……あはははは、ごめんごめん。でも、珍しいですね、信くんが電話してくるなんて。……え、お姉ちゃん？　うん、いますよ、ちょっと待ってくださいね。……お姉ちゃーん！　信くんから電話ー！」

＊

「すみません、二人とも、お呼び立てして」
「ほーんと。おごってもらうからね」
「……うっ」
「小夜美ったら。……いいのよ、ちょうどわたしたちも、稲穂くんたちに話を聞きたいと思ってたの」
云いながら、静流と小夜美は席に腰を下ろした。向かいには、信と詩音が座っている。
信に電話で呼び出され、四人は喫茶店で待ち合わせをしたのだった。
「俺たちに話って……やっぱ、真冬のことですか？」
「うん……稲穂くんたちも、そうよね？」
「はい……」
頷いて、信は面を伏せた。詩音が気遣わしげな視線を、その横顔に送る。
静流と小夜美は、黙って信の言葉を待った。
やがて、信は顔を上げて、口を開いた。
「……あいつ、どうしてますか？」
「うーん……」
顔を見合わせる静流と小夜美。
「表向きは、普段とあんまり変わらないんだけど……ちょっと、雰囲気が違うかな」
「雰囲気……ですか？」
詩音が眉をひそめて、首を傾げる。小夜美が腕組みをして頷いた。
「うん。柔らかくなった……っていうのとは、違うと思うんだ。なんて云うのかな……。以前の彼女は、周囲との関わりを自分から拒んでる感じがあったんだけど、そういうのはなくなったの」
「……」
「それだけなら、いいことなのかもしれないけど……今の彼女は……世界との繋がりをまるで持っていないみたい」
「それって……どういう……」
信が軽く息を飲んで、身を乗り出した。小夜美は小さくため息をつき、首を振った。
「ごめん。ほんと、うまく云えなくて。ただね、話してもなんか頼りないっていうか、確かにそこにいるのに、すごく遠い人に思えるのよね……」
あれから数日が経っていた。
静流と小夜美は何度か真冬に話しかけ、食事を共にしたこともあった。真冬も以前のように、二人を拒んだりはしなかった。

しかし、これまでの態度が嘘のように穏やかな真冬の笑顔が、彼女とのよりいっそう深い溝に思えて、静流も小夜美も、真冬の真意を知ることができなかった

「……」

「……」

信と詩音が顔を見合わせて、ため息をついた。

「何があったのか……聞かせてもらえる？」

「ぼい……」

静流の問いかけに、力無く信は頷き、あの日の出来事を話し始めた。詩音は言葉を挟まず、硬い表情でうつむいていた。

3

「そう……彼女、それで……」

信の話を聞き終えて、ほう、と静流は深いため息をついた。

一方、小夜美は頭を抱えて、うなだれてしまった。

「それって……あたしと話した日だよね。あっちゃあ……最悪の目が出ちゃったか……」

「小夜美。今は『誰のせい』だなんて考えててもしょうがないわ」

「そうだけどさ……」

「――それでも、俺のせいです」

握りしめた拳を振るわせて、信が呟いた。自身をじっと見つめる詩音の悲しげな瞳に、気づくこともできずに。

「信クン……」

「真冬は、三年前の俺と同じことをしようとしてる。それが自分への罰だって思い込んで……。そんなこと……なんの意味もない、なんの償いにもならないって……誰より……知ってるはずなのに……」

「……」

「そもそも……あいつが償うべきことなんて、何もないのに……。俺が……俺が、あいつを……」

「ストップ」

蒼白な表情で自分自身を弾劾しようとする信を、小夜美が遮った。驚いて信が顔を上げると、小夜美は少し厳しい、けれど悲しそうな目を向けていた。

「それ以上は、恋人の前で云っちゃダメだよ」

「……あ……」

はっと信は傍らの詩音を振り返った。

詩音は小さく微笑んで、首を振る。信は云うべき言葉もなく、唇を噛んだ。

そんな様子をじっと見つめていた静流は、暗い声で呟いた。

「このままが……いいのかもしれないわね……」

「……え……？」

意外な言葉に、信は愕然と顔を上げた。詩音も意外そうに目を瞠っている。

「このままが、いちばん誰も傷つかない……そうじゃないかな？」

「……！」

「……っ」

静流の云わんとすることがわかって、信と詩音は絶句した。小夜美が悲痛に顔を歪める。

信が、詩音を選んでしまったから。

真冬には、その答えを受け入れるしかないのなら。

二度と逢わない、と思い詰めてまで、信への想いを振り切ろうとする真冬の決意を、自分たちもまた、受け入れるしかないのではないか――。

「そんなの……だって……それは……！」

一所懸命、言葉を探そうとする信。しかし、何を云おうとも、口にした瞬間、それは真冬のためではなく、自分自身を守るための言葉になってしまいそうで、ただ自らを責める想いに身を震わせるだけだった。

そんな信の震える拳を、詩音がそっと手を伸ばして包んだ。そして、涙を浮かべる信に優しく微笑んで、静流に面を

向けた。
『私……ひとを憎んでしまいそうで、怖かったです」
「え……？」
『詩音ちゃん？」
『真冬さんと、初めて会ったときのことです」
信は自分の胸に手を当てて、瞳を閉じた。自分の裡から出る言葉に、じっと耳を傾けるように。
『誰かを大切に想ったり……誰かを……憎いと思ったり……そんな強い気持ちが私にあるなんて、知りませんでした。何も知らないで、人形のように、生きていました」
『詩音ちゃん……」
『知らなければ、傷つかなかったかも知れない。だけど、もっともっと失うものが多かったと思います。……ううん、そばにあることさえ、気づくこともできなかったでしょう。そのことを私に教えてくれたのが、信さんや唯笑さん、三上くん、私のそばにいてくれた人々……そして……真冬さんです」
詩音は目を開き、じっと静流を見つめた。常の詩音にはない、挑むような視線であったかも知れない。
静流もまたまっすぐに、詩音を見つめ返した。信と小夜美は息を飲んで、そんな二人の様子を見守っていた。
「これは私のわがままです。承知の上で、申し上げます。私は、真冬さんが真冬さんらしさを失うのは嫌です。たとえその生き方が、彼女自身を傷つけるとしても」
「ひどいことを云ってるって……わかってる？」
『はい」
『そう云いきれるのは、あなたが愛されているから。とても傲慢で思い上がった台詞だわ。そう思わない？」
『承知の上だと、申し上げたはずです」
詩音の声も表情も硬かったが、それは以前彼女が身につけていた『仮面」とはあまりに違っていた。脆い自分を隠すためでなく、大切な何かを守るために、詩音は不慣れな激情をほとばしらせていた。

信はそんな詩音の姿に、ほとんど感動していたかも知れない。
『誰も傷つかなければいいだなんて……そんなのは本物じゃありません。いちばん大切なものを、自分自身で壊してしまって……それでどうして……っ」
こらえきれず、詩音の金の瞳から涙がこぼれる。
信が詩音の肩に優しく腕を回すと、詩音は涙に濡れた瞳を彼に向けた。
『私、間違っていますか……？」
「いいや」
笑顔で首を振り、信は静流を見た。微笑んだままで、けれど、真摯な眼差しで。
『詩音ちゃんの云うとおりです。俺たちは、本物しかいらない。どれだけ傷ついたって。……そして、それは真冬も同じだって、信じてる」
「……本物……」
その一言を繰り返したとき、なぜか静流は青ざめて見えた。
小夜美は悲しげに静流と信の双方を見やり、ため息混じりに呟いた。
「もう、いいんじゃない、静流？　そんな、試すようなこと云わなくても」
「えっ……」
小夜美の言葉に当惑し、信と詩音は小夜美と静流を交互に見た。静流は少し困ったように微笑んだ。
『ごめん、意地悪な云い方だったね」
『悪役ぶるなんて、似合わないんだから」
『あ……それじゃあ……」
「このままでいいなんて、あたしたちも思ってないってこと。……ただ、問題は、どうするかよねえ」
小夜美は頬杖をついて、ため息をついた。
詩音の口にしたことは確かに間違ってはいない。けれど、静

流が云ったとおり、それは愛されているから云える言葉だというのも、また確かだっただろう。今の真冬にそれを求めるのは酷であるように、小夜美には思えた。
それでも、そのことを伝えられるとしたら、それはきっと――。
「わたしが、彼女と話をしてみるわ」
小夜美の考えを見透かしたようなタイミングで、静流が強い口調で云いきった。
信と詩音が意外そうに、小夜美がためらいを含んだ視線で、静流を見た。
「……やっぱ、それしかない、かな。でも、大丈夫？」
「なにが？」
静流は小夜美の方に顔を向け、じっとその目を見つめた。小夜美もまっすぐに見つめ返し、やがて、ふっと薄く笑った。
「わかった。任せるよ」
「ありがとう。じゃあ、早速行ってみるわね。稲穂くん、藤村さんのお家、教えて」
「え……あ、は、はい……」
思いがけない静流の行動力と有無を云わせぬ勢いに、信は考える暇もなく答えていた。
真冬の家の住所と簡単な地図が書かれたメモを取り、静流はすぐに立ち上がった。
「じゃあ、行ってくるわ」
「よろしく。……あとで、電話するね？」
「うん。それじゃあ、二人も」
「ぼ……はい」
「よろしく……お願いします……」
目を白黒させながら、信と詩音は店を出て行く静流を見送った。
小夜美はひらひらと手を振り、飲みかけの珈琲に口をつけた。
「……あーあ、冷めちゃった」
「静流さん……大丈夫でしょうか」
不安げに窓の外を見ながら、信が呟いた。詩音も同じ気持ちのようで、眉をひそめて小夜美を見つめている。
小夜美はちらっと上目遣いでそんな二人を見たが、またすぐに視線を落として、冷えた珈琲を飲んだ。
「なにが？」
さっきの静流と同じように、短く問い直す。信はやや不服そうに、口をとがらせた。
「なにがって……静流さんみたいに穏やかな人が、真冬を説得できるかどうか……」
「静流は説得なんてする気はないと思うけど」
軽く肩をすくめて、小夜美は飲み干した珈琲カップを机に置いた。そして、首を傾げる信と詩音に、微笑んで見せた。
「心配いらないよ。静流なら……あのふたりなら……きっと……」
祈るように、けれど確かな信頼を込めて、小夜美は呟いた。

4

真冬はソファに腰掛けて、ぼんやりと過ごしていた。
なにを見ているわけでもない。何かを考えているわけでもない。
ただ本当にぼんやりと、目を開いて座っていた。
不思議と、涙は出なかった。
以前はひとりでこうしていると、信との想い出が次々に甦ってきて、胸をかきむしられる想いがした。
けれど今、真冬の胸にあるのは、ただ虚ろな黒い穴だけだった。
痛まないから、まだマシなのかも知れない。
自分でもくだらないと想いながら、真冬はそんなことを考えた。

そうしてどれだけの時が経った頃か。玄関の呼び鈴が鳴った。

真冬はまるで聞こえていないようになんの反応も示さなかったが、来訪者は辛抱強く呼び鈴を鳴らし続けた。

深いため息をついて、真冬は立ち上がる。インターホンを取らずに、玄関へ向かった。

信や詩音が訪ねてきたのだったら、出ないつもりだった。だから、インターホンを通さなかったのだ。実際、彼らは何度か真冬を訪ねてきていた。母のことで、急な連絡がいつあってもおかしくない、という環境でさえなかったら、真冬はずっと居留守を決め込んでいただろう。

玄関のドアの覗き窓から、外を窺ってみる。するとそこには、栗色の髪の女性が少し困った顔で立っていて、もう一度呼び鈴に指を伸ばそうとしていた。

「……」

ため息を再びついて、真冬はドアを開けた。

「……あ」

「子供じゃないんだから、そんな、何度も押さないでください」

「ごめんなさい。……絶対、居留守使ってるんだろうなって思ったから」

頭を下げながらも、そう云って静流はいたずらっぽく笑った。

真冬は苦笑し、ドアを開けたまま、静流に背を向けた。

「どうぞ。上がってください」

「……ありがとう。お邪魔します」

真冬が何も聞かずに自分を招き入れたことに、少なからず驚きながら、静流は真冬のあとに続いた。

＊

両手に珈琲カップを持って、真冬は静流を待たせている居間に戻ってきた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう」

カップを手に取り、静流は香りを少し楽しんでから、珈琲に口をつけた。そしてカップを手に持ったままで、柔らかい笑顔を真冬に向けた。

「おいしい。藤村さん、珈琲入れるのも上手なのね」

「ありがとうございます」

淡々と答えながら、真冬はいつもどおり、珈琲が冷めるのを待っている。カップを持ち、ふーふーと小さく息を吹きかける仕草が子供のようで、その可愛らしさに静流は思わず笑ってしまった。

「……なんですか？」

じろっと真冬が上目遣いで静流を見やる。静流は慌てて笑顔を納めようとしながら、首を振った。

「う、ううん、なんでも」

「……」

無理に唇を引き結んだ静流をしばらく睨んだあと、真冬はカップに口をつけた。まだ少し熱いのを我慢して一口飲み、それからまた静流に視線を戻した。

「……信に、頼まれてきたんですか？」

「……ううん。話は聞かせてもらったけど……ここへ来たのは、わたしが、あなたと話をしたかったからよ」

「慰めや同情なら、結構です」

「そんなんじゃ……」

「ああ、でも、ひとつだけ、あなたに謝らなければいけないことがありました」

真冬はカップを机に置いた。

「謝る……？」

「ええ」

頷いて、真冬はニッ、と唇の端だけで笑って見せた。猫のよう、と彼女が呼ばれる由縁。

その笑い方が一種の韜晦だと、静流は気づいていた。だが、今日の様子はいつもともまた違い、いっそ泣き出しそうな表情にさえ見えた。

散々偉そうなことを云いました。ごめんなさい」

「藤村さん……」

「だけど……結局、あなたのほうが正しかった。そういうことですよね」

「……え……？」

静流がわずかに眉をひそめる。そのことに気づかず、真冬はうつむいて言葉を続けた。

「自分でもわかっていたことだったのに……この気持ちを捨てられなかった……。手に入らないものをずっとほしがって……子供と同じです。弱かったのは、私……」

「――バカにしないで」

突然、強い調子で遮られ、はっと真冬は顔を上げた。静流はきつい、睨むような視線で真冬を見据えている。

静流のそんな表情を、真冬は初めて見た。それどころか、静流にそんな表情があることを、真冬は考えたこともなかった。

「私はこの想いを、捨てたりはしないわ。絶対に手に入らなくて……諦めるしかなくて……それでも……捨てることなんかできない。それだけが、たったひとつの本物だから……！」

「嘘……っ。だって、あなたは……」

「想いが届かなければ、その恋に意味はないの？」

「……っ」

真冬は絶句し、唇を噛みしめた。体が震えて、涙がこぼれそうになる。

もう一度、今度こそ完全に封じようとした熱い想いが、体の芯から熱く込み上げていた。

けれど、その想いに身を任せることで、再び同じ過ちを繰り返すのが怖くて。真冬はその激情を必死で押さえようとするように、自分自身を強く抱いた。

「そんなの……だって……傷つけるだけだもの……っ。つらいだけ……傷つけるだけ……私は……私には……そんなことしかできないから……っ」

「……」

「だから……捨てるしかない……捨てた方がいいの、こんな、こんな……」

こんな恋、こんな想い。

そう口にすることが、真冬にはどうしてもできなかった。

自分を哀れんだのではなく、そう、ただそれが、自分自身でさえ汚すことも、傷つけることもできない、たったひとつの――。

「……本当に、それだけだったの？」

「――え？」

「つらいだけ、傷つけるだけ……本当に、それだけだった？そんなはずないでしょう？」

「……あ……」

いつの間にか静流の面から怒りは消え去り、真冬と同じように涙で瞳をいっぱいにしていた。その瞳で見つめられて、真冬はようやく思い出した。

彼が教えてくれた、大切なこと。

かけがえのない、この想い。

それがなおさら自分を苦しめるのだと、思っていた。だから、はじめからなかったと思えばいいのだと。

だけど。

本当に、なければよかったのだろうか。あのぬくもりを知らないままでいられればよかったと、本当に――？

真冬は茫然と目を見開き、その瞳からは涙がこぼれ続けた。

静流は痛ましげに唇を噛み、その姿を見守っていた。

第五話「Dearest」

Ah- いつか永遠の
眠りにつく日まで
どうかその笑顔が
絶え間なくあるように
浜崎あゆみ「Dearest」

朝の明るい光の中で、公園の木々は瑞々しく輝いていた。
すでに春は過ぎ去ろうとし、初夏と呼べる季節が近づいている。
自分が過去だけを見ている間にも、時間は確実に流れ続け、そして世界はこんなにも明るく、輝いている。降り積もる雪の中に、ただ立ち尽くしていた私は、やはり自分だけしか見ていなかったのだろう。
そんなことを考えながら、真冬は青空を見上げた。太陽のまぶしさに、思わず目を細める。
そのままの姿勢で、真冬はただ空を見ていた。
やがて、土を踏む足音が耳に届くまで。
「こんなとこで何してんだ？」
懐かしい場所で聞く、懐かしい言葉。
それがこんなにも嬉しい。
だから、真冬は微笑んで、視線を空から下ろした。
「……あんたこそ」
笑顔を向けられて、信は少し戸惑ったように視線をさまよわせた。
しかし、すぐに自分も笑顔を浮かべて、真冬に答えた。なにがそんなに嬉しいのか不思議になるくらい、顔中の笑顔。
「……ここに来れば、お前に会えるような気がして」
「……」
ニッ、と真冬が唇の端だけで笑う。猫のよう、と彼女が呼ばれる由縁。
そして、真冬はゆっくりと信の立つ場所に歩いていった。目の前に立ち、じっと信の笑顔を見つめる。
『一度と逢わないって、云ったのに』
『俺は約束してないよ』
「……ほんと、勝手なんだから」
もう一度、猫のように笑おうとして――、真冬は、やめた。
真っ直ぐに見つめてくる真冬の視線に、信は胸の高鳴りを覚えた。
こんなにも……彼女は……美しかっただろうか……？
信の動揺を見抜いているのかどうか、真冬は微笑んで、呟いた。
『私……あんたが好きよ』
『真冬……』
『謝ったりしたら、ぶん殴ってやるからね』
云いながら、笑顔のままで真冬は拳を掲げた。信は一歩後ずさる。
「……ぐーですか」
『当然』
どちらからともなく、苦笑する。真冬は握り拳をポケットに収め、穏やかに微笑んだまま、言葉を続けた。
「ただ、あんたに伝えたかった。……ただ、あんたに聞いてほしかった。それだけだから」
「……」
「じゃ。帰るわね。送り狼はお断り」
信の横を通り過ぎ、真冬は歩き去ろうとした。
凛と背筋を伸ばしたその後ろ姿に、信は声をかけた。
『真冬……』
『なあに？』

真冬は振り向かずに足を止めて、問い返した。
信は伝えるべき言葉を探した。たくさんあるような気がしたが、たったひとつですべてが伝わるようにも思えた。
「その……サンキュ、な」
「……バカなんじゃないの？」
「ひでえ……」
真冬はゆっくりとした足取りで、公園を出ていった。
わずかに振り向いた真冬の瞳には、確かに涙が浮かんでいたけれど、信はそれに気づかないふりをした。
（ほんと、サンキュ、……真冬）
胸の裡でもう一度くり返して、信はまぶたを乱暴にこすった。

＊

大学のカフェで、静流は一人、昼食を取っていた。今日は小夜美は午前の授業が休講で、来ていなかったのだ。
窓際の席は、眩しいほど日差しが差し込む。ふと静流が窓の外を見やったとき、前の席にランチの乗ったトレイが置かれた。
「ここ、座ってもいいですか？」
静かな声に顔を上げると、黒髪の美しい女性が、少しはにかんだ笑みを浮かべて立っていた。
その顔が可愛らしくて、静流はつい意地悪をしてみたくなった。
「どうぞ。わたしはもう行きますから」
「あ……」
「うそうそ。どうぞー」
「……意外に、意地が悪いんですね」
「そうよー。妹もよく泣かしたわ」
「……」
苦笑しながら、真冬は腰を下ろした。静流はニコニコと微笑んで、真冬を見守っている。
「……そんなに見られると、食べにくいんですけど」
「気にしない気にしない」
「気になります」
深いため息をつくと、真冬は箸を下ろして、静流を見つめ返した。そして、不思議そうに首を傾げる静流に、軽く頭を下げた。
「藤村さん……？」
「その……色々……ありがとうございました」
「わたしはなにもしてないわよ」
「いいえ」
顔を上げて、真冬は微笑んだ。ほんの少し淋しそうで、だけど、やはり喜びを内に秘めて。
「今朝、信に逢ってきました」
「……そう。それで？」
「やっぱり、一発ぐらいは殴ってやればよかったかと思ってます」
「……」
静流は思わず目を丸くして、真冬の顔をまじまじと見つめた。だが、すぐにぷっと吹き出し、声を上げて笑った。
「あはははは。いいわね、それ。うん、そうよ、ガツーンとやってやらないとね。あはははは」
「……そんなに笑わなくてもいいでしょう」
憮然とした表情で、真冬は箸を取って食事を再開した。それでもなかなか静流の笑いは収まらなかった。
「あはは、いいなあ、うん、ほんと、あなたって素敵」
「からかわれるのは、嫌いです」
「そんなんじゃないわよ。あはは、うん、わたしも今度、健くんに技でもかけてやろう」
「……技……？」
今度は真冬が眉をひそめて、静流を見つめた。静流は笑いすぎて目に浮かんだ涙をぬぐいながら頷き、ふと真顔に戻っ

た。
「……わたしが、『この想いは捨てない』って云いきれたのは、あなたのひたむきさを見ていたからだと思うの。だから、お礼を云うのは、わたしの方よ」
「静流さん……」
「……もう、大丈夫、かな？　わたしが人に訊けたことじゃないとは……思うけどね」
「……」
真冬は目をそらし、少し表情を曇らせた。けれど次の瞬間には、心配そうに覗き込んだ静流に、微笑んで見せていた。
「わかりません。……でも、あいつが好きだっていうこの気持ちは……きっともう二度と、ごまかしたり、捨てようとしたりはできないから……」
「……」
「だから、なんとかやっていくしかないと思います」
そう云って、真冬はもう一度、笑顔を浮かべた。
静流が思わず、笑い返してしまうような。
それは真冬自身気づいていなかったけれど、彼女が憧れてやまなかった、あの信の笑顔に似ていた。

そうして、彼女たちは気づく。
冬はいつか、終わっていることに。

Memories Off EX
Scenario for
Mafuyu Fujimura
Episode Ⅱ
"The End of Winter"
end

あとがき

恋をして、だけど、叶わなくて。

そんなとき、選ぶべき答えは『潔く諦める』か、『それでも諦めない』のどちらかしかないのでしょうか。本当は、諦めるか諦めないか、なんて、どうでもいいことなのではないですか。

だって、どっちを選んだところで、好きだって気持ちに変わりはないのですから。

そんな青臭い話が、この作品のテーマでした。

どれだけ傷ついて、つらくても、笑顔で『私、あんたが好きよ』と云える。それだけがたったひとつの本物だから。そういう真冬の姿を描きたかったのです。

あと、真冬にはやっぱり反省してもらわないと、というのもありまして。色々事情があったし、いちばん悪いのは信じないのかって話もありますが（笑）、やはり『Can You Keep A Secret ?』で真冬がやったのは、ひどいことなんですよね。自分にとってかけがえのないものを守るのに精一杯だった彼女が、本当にひとを思いやれるようになるには、やはりそのことに気づかねばならないだろうと。

そのために、真冬には非常につらい展開になりました（涙）。

さて、本作は企画段階では、メモオフ 2nd キャラ総出演に近い形で、もっとスパンの長い話を考えていました。ゲーム本編のバックストーリーというか、裏メモオフ 2nd みたいな感じ。それが実現しなかったのは、まあひとえに私の実力不足なんですけど、真冬が想像以上にへこんでいたからです。ちょっと痛々しくて、このテンションでは長く引っ張れないなあと。いつまでも落ち込んでるのは、彼女らしくないですし。

『裏メモオフ 2nd』は、鷹乃シナリオアレンジバージョンのノベライズでいつかやりたいと思います（ほんとか？）。

いちばんの反省点は、やはり真冬と静流ねーさんが互いに影響を与え合うって感じにできなかったことです。真冬は静流ねーさんに導かれている感が強いですよね。『彼は彼女を救えるか』のときもそうでしたが、私がねーさんキャラを書くと、しっかりしすぎて迷いを見せてくれない……（笑）。

でも、『諦める』ことを選べる彼女は、決して弱い人間ではないと思うし、本編で書いたとおり、諦めるのは、捨てることを意味しないと思う。静流ねーさんはそのことをはっきり意識しないまでも、わかっていたのではないかと思います。

……だけど、本当にいちばん痛恨だったのは、終盤の展開が『Last Regret』とかぶってしまったことだったり。雨の中、詩音の前でぶっ倒れるってシーンは『彼は彼女を救えるか』でもやったし、なんか自分の発想力の貧困さにうなだれるばかりです。うぐぅ。

ということで、真冬の物語はまだもうちょっと続きます。次は完全オリジナルになる予定なので、しばらく準備に時間がかかると思いますが。今度は真冬の真骨頂である『おっとこまえなところ』を全面に出したお話になります。おつきあいいただけると、嬉しく思います。

最後に、真冬を可愛がってくれるすべての人に、感謝を申し上げます。ありがとうございます。次は『春を呼べ ～冬物語 Third Season』で、真冬は皆さんにお目にかかります。

ご感想などいただければ、幸いです。

八神大輔

初出

冬物語 intermission

Lost Memories　二〇〇二年二月二一日

LOVE -Destiny-　二〇〇二年四月一七日

冬物語 Second Season

プロローグ「A song for ××」　二〇〇二年二月二〇日

第一話「Trauma」　二〇〇二年四月一〇日

第二話「TO BE」　二〇〇二年五月七日

第三話「End roll」　二〇〇二年五月八日

第四話「M」　二〇〇二年五月一四日

第五話「Dearest」　二〇〇二年五月一五日